

mnfikmyhk  
Fukapon

私に、はめて欲しいの



「あ、清美……」

その惨事は、夜の公園で起こった。

「はいっ？ ……どなた、でしょうか？」

先客たるブランコの上の少女、上月清美は訝しみながら反応する。

確かに自分の名前が呼ばれたが、突然現れた声の主を彼女は知らなかった。電灯の薄い光の中で顔こそよく見えないが、一七〇センチはあろう高い身長に覚えがない。

「えと、あ、あの……」

もう一方の少女は公園の入り口に突っ立ったまま。せつかくの浴衣が着崩れそうなほど、きつく袴を握りしめ、うろたえている。

二の句が継げずに無言となるも公園から音が消えなかったのは、彼女にとつても幸いだった。

——はあ〜よいよいっ♪

——ドンドンッ

盆踊りの歌と太鼓の音。

今日は夏祭り。さして娯樂の多くないこの村で、それは一大イベントだ。老若男女が神社に集まる。だからこそ、彼女は、うろたえていた。まさかここに、人が、ましてや清美がいるとは思わなかった。

その驚きから数十秒を要した思考の結果が、まさか惨事を招くうとももちろん思わなかったろう。

「あの、人違いだったみたいです。ごめんなさい……」

初めてともに綴られた言葉は、確かな声として、清美の耳に届いてしまった。

「えっ……？ あー、ヒロだーっ！ なんでそんな格好してるの

よう？」

「い、いいえっ」

真紅の袖を翻し公園を出ようとする彼女を、清美は逃がさない。

「待ちなさいってばっ」

勢いよくブランコを降りて駆け出すと、あっさりと捕まえる。

「ほうら、観念しなさい。逃げたってどうせ、明日には顔を合わせんだしね」

清美はにやりと意味深な笑顔で、浴衣姿の少女をブランコへと連行した。

相変わらず夏祭りの音が流れてくる公園で、ブランコの少女は二人に増えていた。

「誰もいないと思ったあー？」

さつきまでとは打って変わって愉快そうにブランコを漕ぐ清美が、大きな声で問いかけている。動いているから聞こえにくいだろうとの配慮と言うよりは、おもしろおかしくて仕方ないのだからか。声色が、楽しみに転じている。

一方の彼女は、清美を引き継いだようにうつむいて、無言のまま返事をしない。

清美は見かねて、ブランコを止めた。

「私もね、誰もいないと思ってここに来たんだ。おそろいだね」

トンと降りて一歩、二歩。

清美は浅く屈んで目の高さを合わせる。少し強く吹いた風が清美の黒髪を流し、正面の頬をくすぐると、誘われるように彼女は顔を上げた。

いつの間にか愉快色が消えた笑顔に、彼女の視線は捕らわれる。

「似合ってるね、浴衣」

「そ、そんなこと……」

「うん、本当だよ。私が着るより綺麗だって」

彼女の浴衣姿は、誰が見ても似合っているだろう。特に目立つのはすなりとした凹凸の少ない体型、高くまとめ上げられたポニーテール。綺麗という形容に嘘偽りはない。しかし、鏡で自身を見たときの背徳感が今更に増して、彼女を襲っている。

どうして外出してしまったのだろうという後悔が興奮へと変わり、却ってぶちまけるように言い放った。

「気持ち悪くないの？　だって僕、男だよ？」

「別にいいんじゃない？　綺麗になりたくて綺麗になってるんだから、全然おっけーだよ」

「よくない、よくないよっ。だって……」

理不尽で非常識で、あつてはならないと思いつ込んでいた彼女を、清美はあつさりを受け入れてしまった。それは彼女にとつてとても嬉しいことのはずなのに、想像から途方もなく外れた状態で、喚くしかないのだろう。

そんな彼女を、清美は静かに抱き留めた。浴衣越しに触れる柔らかな身体は彼女にとつて少し辛かったが、とても温かい。

「ほら、泣かないで。せっかくのお化粧が崩れちゃう」

余計に溢れそうになった涙に清美は気付くと、ゆっくり身体を離し、彼女の眼鏡を外す。そして鞆から取り出したハンカチで、優しく目元を押さえてあげた。わずかに数センチの距離で笑顔が見守っていた。

ブランコに座り地を見つめる少女と、その隣に立ち星空を仰ぐ

少女。二人の間ではしばらく、何の言葉も交わされなかった。それでもお互いに、気まずいわけではなく、むしろ心地よく静寂を過ごしている。

数分がたった頃、清美は視線を落とした。

「綺麗な髪だね、ウィッグ？」

「うん……」

「触ってもいい？」

「うん……」

すっかり落ち着きを取り戻した彼女は、消え入りそうな声で答える。それが余計に彼女を少女らしく見せていることに、清美は思わず笑みをこぼしてしまう。

「へえ、素直にまっすぐだから、本物より綺麗に見えるかもねー」

後頭部から伸びるしつぽをふさふさしながら、聞いていいものかと多少考えた。しかし、興味を止められないのは彼女らしい。ふさふさ遊びながら、自分でも意外なほどあつさりと聞いてしまふ。

「いつから、女の子の格好するようになったの？」

問われた彼女は、さすがに答えに詰まる。清美が蔑視しているわけでも嘲弄しているわけでもないのはわかっているが、秘密にしてきたことを触れられるのは、やはり辛い。

（言ってくればよかつたのに。でも、言いにくいよね、やつぱり）

答えの返ってこない意味を察した彼女は、珍しく思ったことをそのまま口にせず、細心の注意を払って、本心を伝えようとする。

「洋服も化粧品も、揃えるの大変だったでしょう？　貸してあげるよ。まー私のだからさ、あんまり可愛くないし、あんまり数ないんだけど」

「ありがたい。……ちょうど一年前から。外に出るのは、まだ今日で二回目」

苦笑いする清美を見上げ、気付けばつられるように彼女も笑っている。

「そっか。んー……」

彼女が戸惑うこともお構いなしに、突如にゆつと顔を寄せて、清美は彼女の顔をまじまじと見る。

「な、何っ？」

「んー、なんか私より、お化粧うまくない？」

「そ、そんなことないよ」

本人は否定しているが、正直、結構手慣れている感がある。

傲慢じゃないが、清美は滅多に化粧をしなかった。それどころか、あまりおしゃれというものをしない。単純に興味がなかったのだが、よく知った彼女の化粧効果を見て、自分でももう少しやってみようかななどと思ってしまう。

「えー、そんなことあるよー。なんかやり慣れてるー。うー、女の子としては先輩のはずなのに、ちよつと悔しいなあ」

「ううん、清美の方が全然可愛いよ……」

「ヒロは昔っから私に甘いからなあ。可愛い可愛い言われて信じてたけど、現実はねえ」

「ううん、清美は本当に、可愛いと思う……」

目の前で「ヒロの気持ちは嬉しいんだけどねえ」と腕を組む清美に、彼女は心中で言葉を続けた。

（だって、僕のお手本は、清美なんだから……）

漆黒の長い髪も。真紅の浴衣も。去年の清美の真似。彼女に近づいて身近で一番の美少女は、本当に清美だったのである。しかし

清美は、自身をそう評価していないようだ。

高評価が納得いかない風を引きずりながら、にやりと意味深な笑顔。

「でもそこまで言うなら、試してみようか？」

「ふえ？ 何を？」

「お祭り、行こっ」

「えっ……」

突然の提案に、彼女の表情はやはり曇った。

清美とてこの程度は予想できる。だからこそ、背中を押してあげればと確信していた。

「迷ってたんでしょ？」

「……そうだけど」

「なら決まりっ」

「でも……」

「実は私も……ううん、何でもない。さあ、行こっ」

「うん……」  
彼女は結局押し切られ、承諾してしまうように見せた。実は心躍る自分が気恥ずかしく、洪々であるように演技したのである。

その演技に神経を使っていた彼女は、気付かなかったのだらう。なぜか言い淀んだ、清美の言葉に。清美もまた、彼の心中を察する余裕はなく、止まることなく話を進めた。

「あ、そうそう。一人称は『私』ね。でもあまりしゃべらない方がいいかも、声でわかっちゃうから」

「う、うん……」

小首を傾げ、顎にちょこんと人差し指を当てる。清美はおっとりとした仕草でいるが、ものを言う勢いは衰えなかった。

演技で逡巡していたように見せていた彼女も、その必要なく、押され気味になってしまふ。

「それと、『ヒロ』って呼んだらまずいよね？ んー、なんて呼ばれたい？」

「そう言われても……」

「んー、じゃ『ミヒロ』ってどう？ 名前の前と後ろを取ってさ」

「うん、それがいい」

初めて呼ばれた女の子としての名前に、本心が透けたようにテンポよく返事してしまう。彼女はすることにすら気付けないほど、浮かれている。

「じゃあ、決まりつ。さー、行くよーっ！ 私とミヒロと、どっちが可愛く見えるのかしらねー」

そんな彼女を向かいで見ると清美は、彼女の気持ちにとうとう気付いてしまい、いよいよ勢いよく腕を取る。同時に思い切つて、駆け出した。

「ちよ、ちよつと、引つ張らないでよう」

右腕を引つ張られる格好となつてしまつた彼女も笑顔をとともに駆け出して、公園をあとにした。

## S

「まさか完封負けなんて……。何よ、未央の彼氏なんかあんな口りつ娘選んどいて、どうしてミヒロに見とれてんの？ タイプ全然違うじゃない」

あまりの悔しさに清美は人目も気にせず、たこ焼きをパクつきながら愚痴つて歩く帰り道。

まだまだ夏祭りは続いていたが、彼女は度重なる「失礼な男どもの視線」に耐えられなくなり、ミヒロを連れてとつと引き上げてきた。

「ほら、初対面だと思つて、私を品定めしてただけだよ」

一方のミヒロは清美を慰めながら、上々の結果に足取りは軽い。食べ物で両手が塞がっている清美の代わりに二人分の鞆を持ちながら、スキップでもしそうな軽さだ。

清美はミヒロを夏祭りに引つ張っていくと、試してみようと言つたとおり、あちこち歩いたり友達としゃべったりしながら、自分とミヒロとどっちが男の子に注目されるか、試し始めた。しかしその試みは、すぐに終わつてしまふ。クラスメイト、友達の前氏、ナンパしてくる男、全ての男の子がミヒロだけを品定めするという状況にコールドゲームとせざるを得なかつた。

「ふーんだ。どーせ私は可愛くありませんよーだ」

悲惨な結果に清美はすっかり拗ねてしまい、今度はむしやむしやとフランクフルトを食べながらスタスタと歩いている。

「そんなことないつて。清美は可愛いと思う」

「本当？」

急に足を止め、振り返る。

慣れない草履にで後ろを歩いていたミヒロは、突然のブレーキにつんのめつた。

「あつ……」

「危ないつ……。……ごめん、大丈夫？」

「うん。ありがとう」

不意の事故で抱きつく格好となつている清美から、ミヒロが離れようとするも。清美が手を離してくれない。二人の身長差から、

清美の顔はミヒロの胸に埋まっている。

「もう、大丈夫だから……」

「ダメ。ねえ、私が可愛いって、それ、本気で言ってる？」

多少くぐもりながらも、ハッキリとした声が聞こえた。

「うん、本気だよ」

「そっか。ごめんね、今日は無理させちゃって」

「えっ？ ううん、全然無理なんかじゃなかった。清美のおかげで、楽しかった」

「……一人だけ楽しくなるなんて、ずるいよ」

「ごめん、あの、そういう意味じゃなくて……」

突然調子が変わった科白にミヒロは慌てて答えたが、返ってきた答えは揺らぎのない、清美の声。

「私も、無理するね」

「本当は今日ね、お祭りで会ったら、告白するつもりだったの」

清美は彼女を強く抱き、表情を胸に埋めたまま、打ち明けた。

「同じだったの、ミヒロと。私も公園には、誰も来ないって思ってた……」

ミヒロは彼女が言うことを、呆然と聞くことしかできなかった。

少し考えれば察することもできよう、誰に告白するつもりだったのか。しかし考えが回ることはなく、ただただ、突っ立っていた。

「現れたのがミヒロで、運命かもってバカなこと考えた。でもね、それはバカなことなんかじゃなかった」

凜と通る声で言い切ると、清美は腕を解きながらトンと一歩バックステップ。

合わされた視線の先には不敵な笑みが溢れ、いったいどうしたのだろうとミヒロが思う間もなく、彼女は言い放つ。

「私は美坂孝浩ミサカタカヒロが好きです。だから私わたしに、印をください」

「え、えと、僕……!？」

「そう。あ、ヒロかミヒロか、それはどちらでもいいの。私が好きなのは、美坂孝浩なんだから」

「それは、嬉しいんだけど……。なんて言うか、よく、わからないよ……」

「大丈夫、わからせてあげるから。ミヒロは私が好きだもん、だから、ねっ？」

「えーっ？ 確かに、その、好きだけど……。その、印とか、よくわかんない……。ん？ 印って、何？」

「これ、って、あれ？ 私の鞆は？」

「こっただけ……」

ミヒロが左手を挙げてみせると、清美は忘れてたと苦笑いしながら受け取り、鞆の中に腕を突っ込んだ。程なくして引き抜かれた手には、何か、握られている。

「改めて、これ。……ちよつと言いくいんだけど、首輪、ね」

まっすぐ突き出された掌には、革製と思しき首輪が乗っていた。首輪と言われてミヒロが連想するのは犬猫用のそれだが、彼女の出したそれは明らかに別物だった。妙に太く、何より鍵付きの堅牢な作りである。

「……これ、どうするの？」

ミヒロは何も知らずに素直に問うと、清美は僅かに頬を染めている。

「私の首に、はめて欲しいの。私が、ミヒロのものだという、印」

あと一歩の間合いを詰めて、清美は彼女の手を取り、首輪を手渡した。首輪の意味、頬を染める感情が何なのか、ミヒロには理

解できない。

「首輪なんかなくても、私は、清美のこと好きだよ」

「うん、その言葉を信じていないわけじゃないの。私が、はめられたいの。いつもミヒロと繋がっているという印が、欲しいの」

「……ごめん、よくわからないよ。でも、清美の望むことなら、私もしたい」

「ありがたい。お願い、はめて」

反らされる頤。向こうに現れる首は真つ白で、ミヒロには触れることすらためらわれる。首輪を手にしたまま動けないでいると、清美は彼女の気持ちを察したのだろう。瞳を開き微笑みかけ、背中を押した。

「ゆっくりでいいから、ね？　まずは挿さっている鍵を回して、南京錠を外して」

月の明かりで輝く銀色の南京錠を外すと、首輪が開放され、はめられる状態になり。南京錠を握る清美の右手を、柔らかな感触が包む。

「今は私がつてるね。次は、首輪を私の首に回して。大丈夫、痛くないし、きつくはないから。チョーカーと同じだよ」

「うん、じゃあ、するね」

再び突き出される壊れそうな首を抱くように、ミヒロは腕を彼女の背中側に回してから、胸側に持つてくるように首輪を巻いた。

真夏の空気の中でもいくらか体温より低い革製の首輪が、清美の首を包む。

「あんっ」

「ごめんっ！　痛かった？」

「う、ううんっ。何でも、ないから……。次は、はい、この南京

錠で首輪をロックして」

瞳を閉じたままの彼女の右手から、ミヒロは再び南京錠を受け取った。

ツルを首輪側の金具に通し、ツルを本体側に押し込むとパチンと音がする。

「ありがたい。これを外せるのは、ミヒロだけだから」

鍵に触れていたミヒロの指には、いつの間に清美の指が絡みつき、一緒に鍵を抜き取った。

## S

——ピピピピピピピピピピ……

(んあ？　朝か……)

どんな夜を過ごそうと朝は訪れる。眩しい朝日に照らされながら、ミヒロは腕を伸ばして目覚ましを止めようとする。

「おはよ」

しかし指先に触れたのは目覚まし時計でなく、柔らかく暖かなもの。さらには覚えのある声が聞こえるではないか。

「ふえっ？　き、清美っ、なんでここにいるの？」

「これ。外してもらわないと、学校行けないよ」

飛び起きたミヒロの視界では、制服姿の清美が頭を傾げ、トンと黒革の首輪を指さしている。

「あ、そっか……。えっと、鍵は携帯のストラップに……」

「んー、お願い」

——カチャン

南京錠が開放されたのを確認すると、ミヒロはゆっくりとツル

を抜く。

「鍵、外したよ」

途端すっかり自分の首に興味をなくしているミヒロに、清美は不満でいっぱい。

「えーっ、首輪もミヒロが外してよう」

「わかった……。動かないでね」

はめたときの感覚がどうにも消せず、わざと首輪には手を付けなかったのだが。ミヒロはやむを得ず、原因のわからぬドキドキに再び耐えながら、ゆっくりと首輪を取り外した。

「んっ」

「大丈夫っ？」

「う、うん、大丈夫だよ。だってミヒロは優しいもん」

昨夜も同じだった。首輪が触れるか触れないかのところで清美はかすかな声を上げる。

何かに差し迫られたような声にミヒロは今朝も驚いてしまったが、まささらな光に照らされた頬が明らかに上気していることに気付き、理由を聞くのはいけないことのように思えた。

「ありがと。じゃあ、代わりにこれ着けて欲しいの。通学用に見えるのだよ」

ミヒロに気軽に手渡された手提げ袋は、案外重たい。いつたい何だろうと彼女が中を覗いていると、頭上から声がした。

「はい。ミヒロちゃんはこれ着てねっ」

「何……っ！ そ、そんなの無理だよっ！」

「見えないから安心だよ？ それに私のお気に入り」

清美が両手で飾るように見せたのは、水色基調の三角形。女性

用のショーツだ。

「見なくてもダメだってばあ」

「ダメじゃないよう。せつかく今、ミヒロと私のために脱いだんだからあ」

「そ、そんなの余計ダメ！ ダメったらダメえー！」

ミヒロが両手をぶんぶん振って大拒絶を繰り広げると、手にしていた紙袋が落下する。

——ガシャッ

「あのさ……、それ、何……？」

袋の中から飛び出したのは、いわゆるTバック的な形をしていた。しかし、落下音や見た目から、それが硬質な素材であることは疑いようもない。

「貞操帯って言うんだよ。女の子の大切なところ用首輪、かな」

「……誰がはめるの？」

もはや聞かずともわかりきったことを聞いてしまったのは、不幸だったのかも知れない。清美は頬を真っ赤に染めて、答える。

「私はね、ミヒロのものでいたい。ミヒロには、私といつも繋がって欲しいの。だから、ね？ はめて欲しいし、着て欲しいの」

スカートの裾が上げられ曝された真っ新な肌が、ミヒロの表情を彼女とおそろいのものにした。

## あとがき

ごめんなさいごめんなさいごめんなさい。

ども、久々に「お久しぶり」で、いきなり謝る Fukapon です。

今年の上半期は信じられないペースで作品を書いたのですが、今になって振り返ると、どれもひどい質だなと反省しています。

バランスを崩したと言うか、悪いところを直そうとして反対に悪くなったと言うか、そーんな感じ。今回、矯正しようという意気込みはあったのですが、一日半で書けと言われたら……。

言い訳だとは思うんですけどね。うまい人は短時間でもうまく書くんですよ、きつと。いまいち不調だなんて時にその辺にある文庫本をパラッとめくると、出来の差にしよんぼり。才能の差は問題じゃない、要は努力だぜ！ って言い聞かせるのも、時には辛いです。

さて、暗い話（＝言い訳）はこの辺にしまして、今回の作品について。

変態っ！（笑）

男の娘は慣れたものですが、ついにSMかよっ！とゆー突っ込みを入れたくもなりましようが、違うんじゃないかな。「好きな人と一緒にいたい」の延長線上で、ちょっと変異した想い。一緒にいて欲しい、手をつないで欲しい、キスして欲しい、セックスして欲しいは普通で、首輪して欲しいが普通じゃないってどうして？ とゆーことですよ。それがSMって言うんだよってんなら

それでいいと思いますが、別にアブノーマルなことではなくて、清美は清美らしい純粹さで、ミヒロが好きなんだと思います。男の娘の気持ちは多少理解しているつもりなので、それに対応する女の子を持つてきたかったなあつてのがこのお話の源流。

と云いつつ、私もつい一昨日までは、首輪とかわかんないなーとか思ってたんですけど。これ書いたら、首輪して欲しくなっちゃった（笑）操を立てると言うより、いつも想いが繋がっているような気がしますよね。そしてこれを書いている今、実はなんちゃら指輪にも同じ意味を持たせる人がいるのかなと気付きました。んー、首輪してみようかしら。私の場合、私と繋がるんだだけ……。

さて、物書きによる物書きにあるまじき大変わかりにくい後書きはこの辺でおしまいです。今後の予定とか、書いておきましょうか。次は十一月のコミティアです。少し間が開きますが、たまには普通に原稿を書かせてくれよとゆー気持ちもこもっているんです。合同コピー誌『mfrkmyhk CREATURE MIXING』をリリース予定。参加者も大募集中ですから、興味のある方はサークルのウェブサイトをご覧ください。

では、この辺で。次は首輪キャラやろうか。音夢みたいな（笑）

二〇〇九年八月一四日、まだ時間はあると唱えながら。

## 私に、はめて欲しいの

Fukapon

2009年8月16日 初版発行

発行所 まにふいくみやはか

印刷／製本 project KAIGO

Copyright © 2009 Fukapon <fukapon@projectkaigo.org>

<http://www.projectkaigo.org/>

